Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

特集 三都県公開セミナー

万葉のくらし

―考古学から見る武蔵・相模のひとびと―

令和2年度企画展示

リケイ考古学

～イマドキの探ると守る～

開幕!!

東京都埋蔵文化財センター報 120

令和元年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団 普及連携事業 公開セミナー報告

万葉のくらし ～考古学から見る武蔵・相模のひとびと～

去る令和２年１月11日（土）、埼玉県戸田市の「戸田市文化会館」において、「東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー」を開催しました。本年度で12回目を迎えたこのセミナーは、東京都埋蔵文化財センター、かながわ考古学財団、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の各埋蔵文化財関係公益財団が、発掘調査や研究の成果を広く皆様にお伝えするとともに、それぞれの業務と役割について理解を深めて頂くことを目的として、毎年開催している事業です。今回は設立40周年を迎えた埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主催でした。

今回のテーマは「万葉のくらし一考古学から見る武蔵・相模のひとびと一」。昨年５月に元号が「令和」に改元されたことにちなみ、その典拠となった『万葉集』の時代、武蔵・相模の人々の「万葉のくらし」がどのようなものだったのか、発掘調査の成果や出土資料等を基にした報告やミニシンポジウムで迫ったほか、古代食の試食や箏曲演奏などを通じて思いを馳せて頂けるようなセミナーを目指しました。以下、プログラムに沿って報告していきます。

万葉前夜　会場都市の戸田市を代表して戸田市教育委員会の戸ヶ﨑勤教育長からの開宴挨拶、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の藤田栄二理事長による挨拶に続いて、司会進行役の埼玉県埋蔵文化財調査事業団の上野真由美氏から、「万葉の時代」（飛鳥時代から奈良時代）やその前夜に相当する古墳時代に関して、基調報告がありました。

関東地方でもヤマト王権と支配関係を結んだ豪族が地域を統括し、様々な古墳が築造されました。古墳時代後期になると、地方豪族はヤマト王権から国造という職を与えられ、ヤマト王権は間接的に地方を支配したようです。

その頃の「すまい」は主に竪穴住居で、古墳時代前期頃までは住居の中央付近に作られた炉で煮炊きをしていましたが、中期頃には、壁にカマドが作られるようになりました。「うつわ」は土師器と呼ばれる素焼きの土器で、カマドの普及に伴う煮炊き用の甕の長胴化や甑（蒸し器）の大型化、丸底の坏が登場するなどの変化がありました。

そして万葉の時代になると、飛鳥時代には厩戸王こと聖徳太子らによる隋との交流や天皇を中心とした国家体制づくりが進み、７世紀に唐が中国を統一すると、脅威を感じた日本では中央集権化が一層進められ、乙巳の変を経て政治改革「大化の改新」が行われ、天皇による直接支配がはじまりました。

その頃になると「国」が誕生し、官人の「国司」が中央から派遣されました。武蔵国や相模国にも彼らによって都の文化等が持ち込まれたようです。以下の報告でそれらを明らかにしていこうということでした。

報告１「万葉のすまい」　東京都埋蔵文化財センターの小西絵美調査研究員が、すまいについて、東京都内の発掘調査事例を中心に報告しました。

ヤマト政権中枢の畿内では、「すまい」は７世紀頃には竪穴建物から掘立柱建物に代わっていきますが、武蔵・相模を含む東国では８世紀頃に掘立柱建物が出現するものの、集落においては双方が併存していました。地方官人である国司や郡司は、掘立柱建物で構成された建物群をすまいとしていましたが、庶民は相変わらず竪穴建物に住んでいたということでした。

報告２「万葉のうつわ」　かながわ考古学財団の髙橋香氏からは、「うつわ」について、万葉の時代には身分や地域によって食事の内容とそれに使ううつわが異なっていたこと、中国から箸や匙がもたらされたことにより、手で持って食べる丸底のうつわから、置いて食べるうつわに変化したと考えられること、武蔵と相模の比較、製作方法や製作地、煮炊

写真１「醤」の試食会

きについての報告等がありました。

「ひしお」の試食　昼休みには、醤油の原型とされる万葉の調味料「醤（ひしお）」の試食会が会場内でありました。クラッカーに盛って配布された醤は味噌に似たペースト状で、口にしたところ、やや強い塩加減で、味も味噌に似ていました。また、会場内では発掘調査で出土した土器の展示も行われました。

報告３「万葉のうたげ」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団の大塚邦明氏から、うたげの行われた場所については、官衙（かんが）においては給食施設の厨家（くりや）を示す「厨」と書かれた「墨書（ぼくしょ）土器」の出土、国司館や郡家（ぐんけ）、集落におけるうたげの後に一括廃棄された土器や木製品、食物残滓（ざんし）の出土例から推定できること、うたげで用意された飲食物については、食物残滓や文字資料から推定できること等、埼玉県内の調査事例を中心に報告がありました。

記念講演「万葉に生きる女性」　埼玉学園大学の服藤早苗名誉教授の記念講演は、万葉集の歌を題材として、当時の男女のおおらかな恋愛模様から始まり、当時は男女が経済的・社会的にほぼ対等であったこと、貴族女性であっても労働力として田植えに係ったりしていたことなど、女性史がご専門の先生ならではの楽しいお話が盛り沢山でした。

戸田市の文化財　今回のセミナーの開催地である戸田市の教育委員会の吉田幸一氏から、戸田市の立地と環境、市内遺跡の概要、出土品や近代の建築などの市内の文化財についての紹介がありました。

箏曲演奏　埼玉県立浦和第一女子高等学校琴部の皆さんに琴を演奏して頂きました。これまでの報告や講演で浮かび上がってきた万葉の人々の姿を頭に描きつつ、優雅なひと時を過ごすことができました。

古代食の復元について　プログラムにはありませんでしたが、服藤教授からのご指名で、会場にいらしていた東京医療保健大学の三舟隆之教授に急遽

写真２　箏曲の演奏

写真３　ミニシンポジウム

ご登壇頂き、ご専門の一つでもある古代食の復元や「醤」についてお話しして頂きました。

ミニシンポジウム「万葉のくらし」　報告者３名と服藤教授、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の赤熊浩一氏（司会）、田中広明氏（オブザーバー）を加えた６名でシンポジウムが行われました。

今回、３つの報告においては報告者がテーマとなる歌を万葉集から選び、そこから報告を展開するというスタイルでしたが、まずはその歌について、考古学の専門家としての所見が述べられました。それに続き万葉前夜と万葉の時代の間で変化したものについて、小西調査研究員からは、掘立柱建物は西国と東国で普及の度合いと使用方法が異なることや掘立柱建物の出現により集落の景観が変わったこと、髙橋氏からは、坏の底部が変化したのは中国から仏教とともに渡ってきた「箸」によって食事のスタイルが変化したためと思われること、大塚氏からはうたげの姿の変化について等、各報告の補足説明や討議がありました。

また、服藤教授からは、万葉の時代の日記に記述が少ない「食」についてや、律令（りつりょう）制の導入前は男女平等だったこと等について考古学的な見地で研究・解明してほしいというご要望がありました。

シンポジウムの後、閉宴の挨拶を以て本セミナーは終了となりました。今年は報告や講演以外にも様々なイベントを織り交ぜており、当日ご来場頂いた 339 名の方に様々な視点で「万葉のくらし」への理解を深めて頂けたことかと思います。

来年度は東京都埋蔵文化財センターの主催で開催します。日時や会場、テーマについては現在のところ未定ですが、より多くの皆様にお楽しみいただけるような公開セミナーにしたいと思いますので、詳細の発表を楽しみにお待ちください。　（相原正人）

遺跡だより 123

調布市　染地遺跡

所在地：調布市染地２丁目～３丁目
調査期間：2019 年 8 月～ 2021 年 2 月（発掘）
調査面積：6,476 ㎡

染地遺跡（調布市 No.49）は、多摩川中流域左岸の沖積低地に立地し、調布市染地二丁目から三丁目にかけて広がっています。この遺跡では昭和 41 年以降、複数の地点で発掘調査が行われており、その結果から縄文時代晩期を最古として、古墳時代、奈良・平安時代が主体となる集落遺跡だと考えられるようになりました。遺構の多くは、沖積低地内でも粘土基盤層が高い、微高地上で確認されています。

現在調査を行っている第 128 地点は、遺跡の東端付近に当たります。令和２年２月現在までに調査範囲全体のうち約 1/4 程度の面積を調査しており、地表から約 1.7m 前後掘り下げたところから、古墳時代の竪穴建物跡、竪穴状遺構、溝、土坑などの遺構が見つかっています（写真 1）。

竪穴建物跡はこれまでに７軒確認されています。それらの時代的位置づけは、出土した土師器の年代観から古墳時代前期と中期に大別できると考えられます。

古墳時代前期の竪穴建物跡から見つかった炉には、どれも遺構の壁寄りに造られているという特徴が見られました。さらに５号竪穴建物跡（写真２）の炉は興味深いことに、火床面の上から長径約 20 ㎝の焼土ブロック３つが放射状に並んだ状態で見つかりました。その出土状況から推測するならば、並べた焼土ブロックを五徳のように使用した可能性が指摘できます。

一方で、古墳時代中期の竪穴建物跡は、炉ではなくカマドを備えています。これまでに確認されたカマドは、遺構の年代からカマドが普及し始めた時期に位置づけられると考えられています。

竪穴状遺構は４基確認されており、いずれも概ね一辺約 4m の隅丸方形を呈し、深さは約 0.3 ～ 0.5m を測ります。竪穴建物跡に似た規模と形状を示しますが、炉・柱穴・周溝などは認められません。特徴として、比較的状態の良い遺物がまとまった状態で大量に出土しているという点や、石製模造品や高坏といった遺物が見つかっているという点が挙げられることから、祭祀に関わる遺構である可能性を検討しています。

溝は４条見つかっています。その中には、幅約 12m の大規模なものも含まれています。これについては現在調査中のため詳細は不明ですが、調査地のほぼ中央を東西方向に横断する小河川の旧河道ではないかと思われます。

続いて、これまでに出土した遺物について紹介いたします。遺物の多くは古墳時代前期～中期の土師器片ですが、遺構が確認された面の直上に堆積している遺物包含層からは、縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺物がほぼ同じ高さで見つかっています。このように、幅広い年代の遺物が同一の層から出土している理由としては、出土遺物の年代の中で最も新しい江戸時代に、遺跡の近くを流れる多摩川などの河川が増水したことが考えられます。その際に、水が周囲の堆積土を攪拌し、様々な種類の遺物が泥とともに流れ込んできたのでしょう。

染地遺跡は、多摩川という主要な河川が付近を流れていることから、交通の要所と考えられている地域であり、他地域との交流を示す遺物や遺構が今後出土する可能性も考慮して調査を進めなければなりません。さらに、今回の染地遺跡での調査はこれまでで最も広い範囲を調査するため、遺跡の特徴を知る上で重要な調査だと言えます。　（市田直一郎）

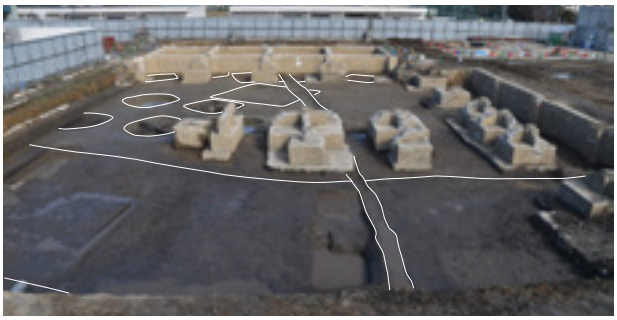


写真１　これまでに確認された遺構（南から撮影）

写真２　５号竪穴建物跡

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃43 多摩ニュータウン No.125 遺跡

昭和59年（1984）のことです。この年は年明け早々から厳しい寒さで、発掘調査作業も遅れ気味な状況になっていました。忘れもしない1月19日木曜日、朝から凍てつくほど気温が下がり、午前10時ごろには雪が降り始めていました。ちょうど休憩時間になったので、現場事務所内に移動し外の様子を眺めていましたが、細かい雪が絶え間なく降り続き、辺りは見る間に白くなってしまったのです。

積もった雪をギュッと握っても固まらずサラサラとこぼれてしまいます。「これがパウダースノーか」

南関東でパウダースノーなんてまずお目に掛かれないと思っていたので、感激でした。

雪はやむことなく降り続き、交通機関に支障が出る可能性を考慮し、公立の小・中学校・高校は昼頃に休校となり、自分たちも臨時休業となりました。積雪は大手町で22㎝を記録、東京の交通はとんでもないパニック状態になってしまったのです。

季節は移り、暑い暑い夏になりました。今回紹介する八王子市松木に所在した多摩ニュータウンNo.125遺跡の調査現場では、連日の猛暑で冬とは全く違う経験をしました。

No.125遺跡は旧石器時代、縄文時代、古代の遺物や遺構が発見された遺跡で、特に、旧石器時代はかなりの広範囲に複数時期の人の営みが残された遺跡として知られています。発掘調査は数次に亘（わた）って行われましたが、自分が担当した部分は、北西に突き出た枝尾根の先端部が範囲でした。ただ、宅地として造成され、関東ローム層まできれいに削られていたこともあり、調査は最終段階の旧石器時代からのスタートでした。

No.125遺跡遠景（写真中央）

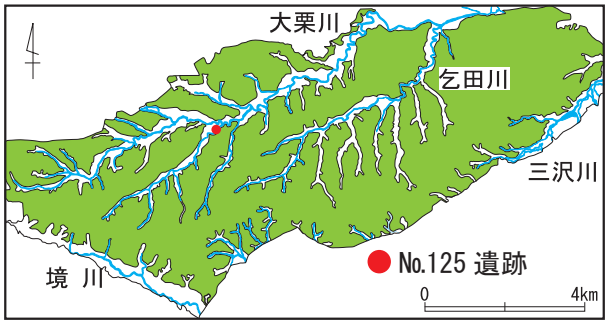
その日は朝から気温がうなぎのぼりで、それでも「八王子の夏は毎年暑いから…。」と、発掘作業を続けていました。その頃は現在のように、「熱中症」という言葉がなく日射病とか言っていましたが、それほど気にすることもありませんでした。

夏のローム層の調査は結構つらいものがあります。それでも頑張って7月、8月を越し、9月になりました。そしてその日、9月3日でした。昼休憩を済ませた後、プレハブから一歩外に出た瞬間、頭はクラッ、膝がカクンとなりもう少しで倒れそうでした。一瞬にして意識を奪いかねない強烈な太陽の光と暑さだったのです。

それもそのはず、八王子の観測点で39.2℃を記録していたのです。当時の東京都の観測史上最高気温でした。まだ若く元気な頃だったので、倒れずに済んだのでしょう。今だったらかなり危なかったかもしれません。

冬は極寒で降雪も多く、夏は猛暑で最高気温を記録したこの年に発掘調査をしていたことは、とても貴重な経験になっています。

この後の東京都の最高気温の更新は、2004年7月20日に都心部と練馬区の観測点で39.5℃、2018年7月23日に青梅の観測点で40.8℃を記録しています。青梅（おうめ）は緑も多くそれほど暑くならない地域なのですが、やはり気候変動の影響が現れているのではと思わざるを得ません。コンクリートやアスファルトが多く、緑が少ない今の環境を少しずつでも変えていかないと、もっともっと大変なことになってしまうのではないでしょうか。ひとりひとりが考え心掛けて、自分たちの地球を守っていく必要があると思います。　（並木　仁）



あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.16

―　東京都庭園美術館レストラン　港区旧白金御料地遺跡（みなとくきゅうしろかねごりょうち）　―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。
このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。
もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

JR 目黒駅から東へ 500 mほど歩くと、緑豊かな森が見えてきます。この辺りが、今回ご紹介する旧白金御料地遺跡です。遺跡の範囲には、東京都庭園美術館、隣接する国立科学博物館附属自然教育園などが含まれています。旧白金御料地遺跡では過去にも発掘調査が行われていますが、当センターでは平成 29（2017）年、庭園美術館レストラン改築工事に伴い、発掘調査を実施しました。

旧白金御料地遺跡一帯は、寛文４（1664）年に讃岐高松藩松平家（さぬきたかまつまつだいら）が下屋敷（しもやしき）として拝領（はいりょう）して以降、その範囲を拡張しながら、幕末まで屋敷地として利用され続けました。今回の発掘調査では近世以降の遺構や遺物が発見されており、これらは讃岐高松藩松平家が拝領していた当時の暮らしぶりを示す痕跡と考えられます。中でも胞衣（えな）埋納遺構が５箇所発見されており、その位置や時期などから、屋敷地の一角が下屋敷や抱屋敷（かかえやしき）居住者の胞衣処理域として利用されていた状況が明らかになりました。

明治時代以降、遺跡周辺は海軍や陸軍の火薬庫、帝室林野局所管（ていしつりんやきょく）の「白金御料地」などの変遷を経て、昭和８（1933）年にはアール・デコ様式を備えた朝香宮邸（あさかのみや）が竣工します。その後、朝香宮邸は、昭和30（1955）年から赤坂迎賓館（げいひんかん）開設までの約 20 年間、白金迎賓館として利用され、現在では東京都庭園美術館として公開されています。

穏やかな春の日に、散策も兼ねて現地へ足を運んでみてはいかがでしょうか。　（小西絵美）

◆調査成果が掲載された報告書
2017『港区旧白金御料地遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 328 集　東京都埋蔵文化財センター

写真１

写真２

写真１　改築された庭園美術館のレストラン。発掘調査を経て、平成 30（2018）年 3 月に西洋庭園とともに竣工した。
写真２　庭園美術館本館の旧朝香宮邸。東京都指定有形文化財［建造物］第 1 号に指定された後、国の重要文化財にも指定された。

写真３　東京都教育委員会提供

写真４　東京都教育委員会提供

写真３　レストラン地点の遺構全景。近世以降の溝や土坑、ピットをはじめ、胞衣埋納遺構や瓦敷き遺構などが見つかっている。
写真４　3 ～ 5 号胞衣埋納遺構。写真 3 の水色の矢印付近で発見された。いずれも 19 世紀後半以降と考えられる。

令和２年度
企画展示へのご招待

リケイ考古学

イマドキの
探ると守る

2020 3.20 FRI
2021 ～3.10 WED

「私はブンケイだからコンピューターは苦手！」、「やっぱ、就職に有利なのはリケイだよね…」など。学問のみならず、人の考え方や性向まで、文系・理系のカテゴリーで区別するのは日本人独特の感覚と言われています。そこで質問。遺跡を発掘し、出土した土器の形や模様から名もなき人々の歴史を復元していく「考古学」はどちらでしょう？そう問われれば文系と即答される方が多いはず。しかし、近年の遺跡調査には、様々な理科学的手法が導入され、新たな知見が次々と得られています。

例えば、遺跡で焚火の跡が見つかったとしましょう。中に数ミリほどの小さな炭粒が残っていれば、含まれている極々わずかな炭素の放射性同位体の割合から、何年前の焚火なのかを調べることができます。その組織を電子顕微鏡で観察すれば、薪に使われた木の種類、すなわち当時の遺跡周辺の自然環境も判ります。出土した石器を顕微鏡で観察すれば、その使われ方が見えてきますし、Ｘ線を用いて石器に使われた黒曜石を元素分析すれば、どの地域から運ばれてきたのかを突き止めることもできます。土器の表面に残された小さなくぼみのレプリカ（複製）を作成すると、なんと燃えてなくなった種や実などの形が姿を現します。実際、こうした成果に裏付けられ、先史時代のイメージも近年大きく変わりつつあります。

私たち東京都埋蔵文化財センターが実施する発掘調査の報告書にも、こうした理科学的手法を用いた成果が数多く盛り込まれています。また、こうした調査に対応するべく、当センターにもＸ線透視装置、CT スキャン、電子顕微鏡、蛍光Ｘ線分析装置、赤外線カメラなどが備えられ、ちょっとした分析センターのようです。また、最新のデジタル技術の応用によって、従来の遺構測量や出土品の実測なども、より詳しく、より迅速に実施できるようになりました。

また、発掘調査では、出土したまま放置すると劣化してしまう木製品や金属製品が見つかることもあります。これらをより良い状態で後世に伝えるための技術も格段に進歩してきました。当センターでも、大型の樹脂含浸槽や真空凍結乾燥装置などを用いて、毎年多くの脆弱な出土品の安定化処理を行っています。その他の出土品や記録類に関しても、未来に引き継いでいくために、新たな技術を用いて、多くの努力が積み重ねられています。

そこで、令和２年度の企画展示は、こうした理科学的手法を用いた調査や資料保存についてご紹介することにしました。「わずかな証拠から、こんなことまで解るんだ」、理系に苦手意識をもっている方でも、そんなワクワクを感じてもらえる楽しい展示を目指しております。是非、埋蔵文化財センターまでお運びいただければと思います。　（長佐古真也）

写真１　縄文時代の住居跡に残された小さな炭粒。ここから一体何がわかるのか？

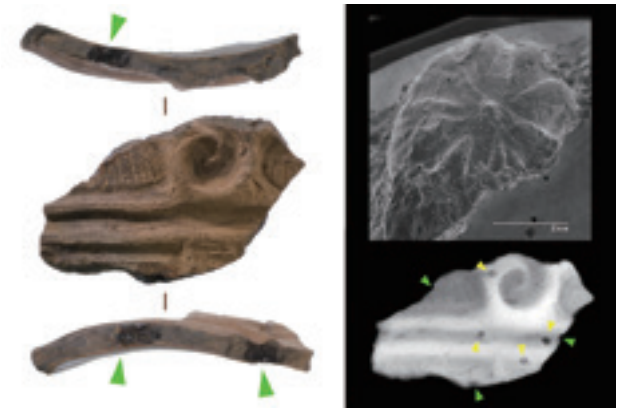


写真２　土器に残る小さな穴。レプリカを作って調べてみると…

写真３　火事で被災した瓦の修復。その方法とは…

令和２年度　行事のご案内（事業計画）

★新規行事

行事名	日時		対象	人数	申込	締切
文化財講演会	13:30 ～ 15:30	①9月26日(土) ②10月24日(土) ③11月21日(土)	どなたでも	先着100名	-	-
調査研究員講演会 ★	13:30 ～ 15:30	①7月22日(水) ②9月16日(水) ③10月7日(水)	どなたでも	先着100名	-	-
多摩市共催文化財講演会	13:30 ～ 15:30	①2月3日(水) ②2月10日(水) ③2月20日(土)	どなたでも	先着100名	-	-
企画展示ギャラリートーク	10:30 ～ 11:30	①9月26日(土) ②10月24日(土) ③11月21日(土)	どなたでも	参加自由	-	-
学芸員ギャラリートーク「大昔の多摩を語る」	10:30 ～ 11:30	①4月26日(日) ②6月28日(日) ③8月30日(日) ④11月29日(日) ⑤1月31日(日) ⑥3月28日(日)	どなたでも	参加自由	-	-

日時			行事名	対象	人数	申込	締切
4月	18日（土）	10:00 ～ 12:00	「縄文の村」自然観察会①	中学生以上	20名	○	4/6
5月	3日（日・祝）	10:00 ～ 16:00	縄文ワクワク体験まつり	どなたでも	参加自由	-	-
	4日（月・祝）						
6月	6日（土）	9:30 ～ 11:00	トンボ玉作り①	中学生以上	各回6名	○	5/18
		11:30 ～ 13:00					
		14:00 ～ 15:30					
7月	4日（土）	10:00 ～ 15:00	縄文の糸作り	中学生以上	20名	○	6/15
	25日（土）	9:30 ～ 16:00	縄文土器作り①	小学4年生以上と保護者	12組	○	7/6
	26日（日）	9:30 ～ 16:00	縄文土器作り②	小学4年生以上と保護者	12組	○	7/6
	28日（火）	10:00 ～ 15:00	リケイ考古学ワークショップ① ★	小学4年生以上と保護者	10組	○	7/7
8月	4日（火）	10:00 ～ 12:00	縄文レリーフ作り①	小学4年生以上と保護者	12組	○	7/14
		13:30 ～ 15:30	縄文の布作り①	小学4年生以上と保護者	12組	○	
	5日（水）	10:00 ～ 16:00	低年齢向け 植物から糸を作ろう ★	どなたでも	参加自由	-	-
	12日（水）	10:00 ～ 16:00	低年齢向け 縄文パクパクを作ろう①	どなたでも	参加自由	-	-
			低年齢向け 縄文アートで楽しもう①				
	15日（土）	10:00 ～ 12:00	火おこし道具作り	小学4年生以上と保護者	12組	○	7/27
		13:30 ～ 15:30	勾玉作り	小学1年生以上と保護者	12組	○	
	19日（水）	10:00 ～ 12:00	縄文レリーフ作り②	小学4年生以上と保護者	12組	○	7/29
		13:30 ～ 15:30	縄文の布作り②	小学4年生以上と保護者	12組	○	
	22日（土）	9:30 ～ 13:30	縄文土器の野焼き①	どなたでも	参加自由	-	-
	26日（水）	10:00 ～ 16:00	低年齢向け 縄文パクパクを作ろう②	どなたでも	参加自由	-	-
			低年齢向け 縄文アートで楽しもう②				
9月	5日（土）	9:30 ～ 16:00	縄文土器作り③	中学生以上	25名	○	8/17
	6日（日）	9:30 ～ 16:00				○	8/17
	10日（木）	10:00 ～ 12:00	勾玉・耳飾り作り①	中学生以上	25名	○	8/20
10月	3日（土）	10:00 ～ 12:00	「縄文の村」自然観察会②	中学生以上	20名	○	9/14
		13:30 ～ 16:00	貝の腕輪作り	中学生以上	15名	○	
	10日（土）	9:30 ～ 13:30	縄文土器の野焼き②	どなたでも	参加自由	-	-
	14日（水）	10:00 ～ 12:00	縄文の布作り③	中学生以上	30名	○	9/23
	31日（土）	10:00 ～ 14:00	縄文食体験①	小学4年生以上と保護者	12組	○	10/12
11月	1日（日）	10:00 ～ 14:00	縄文食体験②	中学生以上	25名	○	10/12
	4日（水）	10:30 ～ 11:30	特別展示ギャラリートーク① ★	どなたでも	参加自由	-	-
		14:30 ～ 15:30	特別展示ギャラリートーク② ★	どなたでも	参加自由	-	-
	7日（土）	10:00 ～ 12:00	勾玉・耳飾り作り②	中学生以上	25名	○	10/19
		14:30 ～ 15:30	特別展示ギャラリートーク③ ★	どなたでも	参加自由	-	-
	14日（土）	10:00 ～ 16:00	考古学講座（2日間連続）	中学生以上	10名	○	10/26
	15日（日）						
	25日（水）	9:30 ～ 11:00	トンボ玉作り②	中学生以上	各回6名	○	11/4
		11:30 ～ 13:00					
		14:00 ～ 15:30					
12月	6日（日）	10:00 ～ 15:00	遺跡庭園であったまろう	どなたでも	参加自由	-	-
1月	9日（土）	13:30 ～ 15:30	映像上映会	どなたでも	先着100名	-	-
	16日（土）	10:00 ～ 15:00	リケイ考古学ワークショップ② ★	中学生以上	25名	○	12/23
2月	17日（水）	10:00 ～ 12:00	コハク勾玉作り	中学生以上	20名	○	1/27
3月	20日（土・祝）	10:30 ～ 11:30	令和3年度企画展示オープン解説	どなたでも	参加自由	-	-
		13:30 ～ 15:30	遺跡発掘調査発表会	どなたでも	先着100名	-	-

●「申込」が○の行事は事前申込が必要な行事です。事前申込はWebの申込フォーム、または往復はがきでの申込みとなります。
●Webでの申込みは、当センターホームページ内のイベント申込入力フォームによりお申し込みください。申込締切日の約1か月前に掲載いたします。
●往復はがきでの申込は、中学生以上対象の行事では1人につき1枚、子供・保護者対象の行事では1組(3名まで)につき1枚の往復はがきが必要です。
「行事名・住所・氏名・年齢・電話番号」をご記入の上、〒206-0033 多摩市落合1-14-2 東京都埋蔵文化財センター ○○○(行事名)係宛 までお申込みください。
●いずれの行事も応募者多数の場合は抽選となります。
●ご記入いただいた個人情報は、該当事業実施の目的のみに利用します。利用目的に同意の上、お申し込みください。

お問合せ：東京都埋蔵文化財センター 経営管理課広報学芸担当 042-373-5296（平日のみ9:00～17:30）https://www.tef.or.jp/maibun/

※今号の表紙：3 月 20 日から令和 2 年度企画展示「リケイ考古学 ―イマドキの探ると守る―」が始まりました。写真は当センターの分析室の様子で、X 線透視装置や電子顕微鏡などが備えられています。ここで収蔵品や出土品の分析が行われています。

たまのよこやま 120　　2020 年 3 月 31 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 https://www.tef.or.jp/maibun/